

Title	ピューリタンと祈祷書問題（共同研究報告：ピューリタニズム研究）
Author(s)	豊川, 慎
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-5 : 17-18
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2358
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

【ピューリタニズム研究】 ピューリタンと祈禱書問題

2010年2月23日（火曜日）、聖学院本部新館2階集会室において、2009年度第2回「ピューリタニズム」研究会が開催された。当研究会の研究代表である松谷好明氏（聖学院大学総合研究所特任教授）が「ピューリタンと祈禱書問題」と題する発題を行った（研究会出席者は15名）。以下、発題の概要を記す。

松谷氏は、まず初めに、16、7世紀のピューリタンによる祈禱書批判の考察の意義、特に日本のプロテスタント教会の聖餐式を含む礼拝の現状に対するその今日的意義に関して述べた後、エリザベス朝初期から名誉革命までのピューリタンたちによる祈禱書批判の歴史を一次資料に基づいて丁寧に解説された。エドワード第一祈禱書（1549年）、第二祈禱書（1552年）、エリザベス祈禱書（1559年）、ジェームズ一世祈禱（1604年）、チャールズ二世祈禱書（1662年）といった各時代の祈禱書に対してピューリタンたちがどのような批判を行ったのかということが祈禱書内容の比較や歴史的コンテキストを踏まえ通時的に論じられた。

松谷氏によれば、130年間にわたる祈禱書批判の歴史において、ピューリタンたちは祈禱書それ自体の存在を批判したのではなく、そこに記された具体的な諸事項に対して批判の矛先を向けたのであった。それは例えば、洗礼の際の十字の印、聖餐を跪いて受けること、結婚指輪、聖職者の従来の祭服などに対してであった。なぜならそれらは秘跡としての結婚や聖職者独身制、化体説に基づく聖餐のあり方などカトリック教理に基づく

ものであったためである。ピューリタンたちは祈禱書からローマ・カトリック的なものの残滓を一掃しようとしたのであったが、それはピューリタンたちが神に対する公的礼拝を徹底して神の御言葉に従って考えたからであった。

牧師たちは祈禱書への支持とその順守とを「同意署名」をもって誓約することが義務付けられていたが、それが国王至上権や主教制などと結びつけられていたため、ピューリタンたちにとっては良心的に受け入れがたい面がそこにはあった。松谷氏はピューリタンたちによる諸祈禱書に対する批判の根底には彼らの深い聖書の敬虔があったことを指摘し、次のように論じられた。「彼らの公的、私的礼拝によって培われた聖書の敬虔こそが、祈禱書に対する建設的批判を生み出したのである。ピューリタンの敬虔は、静寂主義の敬虔ではない。彼らの聖書の敬虔の裏付けは、キリスト者の自由と良心の自由の教理である」。そしてこのような自由の教理が端的に要約されているのがウェストミンスター信仰告白第20章第2節であり、氏によれば、この箇所は「ローマ・カトリック教会の教説と実践に対する根本的批判」であり、「かかる自由の教理がピューリタンによる祈禱書批判の原動力となった」のであったと述べ発題を締めくくられた。

発題後には日本のプロテスタント教会の聖餐式をめぐる問題や教会と国家の関係などに対して16世紀、17世紀のピューリタニズムからわれわれは何を学ぶべきかといった質問やそれに対する応答が活発になされ、誠に実り多い研究会の時となった。



松谷好明 ピューリタニズム研究会代表



「ピューリタンと祈禱書問題」と題しての発表があった

(文責：豊川慎 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科 博士後期課程)

(2010年2月23日、聖学院本部新館2階)